

会 員 寄 稿

十年目を迎えた私達

都 英 衛

東山ユースホステルを通過して名古屋インターにむすぶとされていた高速道路路案が、藤巻地区を通る案に変更されるであろうと報道されたときの驚きと口惜しさは十年たったいまも、まざまざと思い出すことができます。その日から今日まで、住民の意志が変わらずにずっともちつづけられてきたことを私たちは評価してよいのではないのでしょうか。目立たない陰の努力を黙々としてつづけてこられたリーダーの方々や中心になってこられた方々に対して、一人の住民として心から感謝を申し上げたいと思っています。

これからの十年の間にどんなことが私達住民の上におきってくるのか。どうも考えれば考えるほど気の重いことです。しかし結局はひとりひとりの問題であり、それぞれの家族の問題なのですから、それを全体のエネルギーとしてお互いによく話し合い、ひとつのグループとしてまとまってゆくことが、もっともむづかしく、大切なことでありましょ

う。運動の在り方そのものも、十年をひと区切りにして、もういちど出発点にもどって考えてみることも意味があるのかも知れません。

例えば、環境の問題です。不幸にして高速道路がこの街を通過することになった場合、自然環境と、その中に住んでいる私達に、如何なる影響があるかという予測について、すぎ去った十年間いろいろ私達は検討し、行政当局とも話し合ってきました。これからは道路計画の変更を含めて、この自然環境をまもってゆく具体的な方法について運動を進めてゆくのもひとつの視点であるかも知れません。

なぜならば、高速道路を建設する立場の行政当局は同時にまた、市民の生活環境を改善し住民の健康をまもることを義務づけられた行政当局でもあります。環境をまもることについて行政と住民はいつも同じ立場であるわけで、十分話し合ってゆくことは可能ではないか。そんなことを考えてみる昨今であります。

早 や 十 年

南 川 和 子

十年を振り返ってみますと、時の流れの速さにおどろか

されます。その間、私達を取り巻く社会も大きく変わりました。知事、市長の交代に代表される行政の変化、貿易摩擦や円高デフレを懸念し公共投資で内需拡大を求める声も日増しに高くなっています。また個人の価値感もますます多様化し、個性化して今は大衆ではなく「分衆」の時代だなどといわれるほど変化しました。

私達の置かれている状況はキビシサを増すばかりです。

最近も新幹線訴訟が和解という形で終わり、長年、騒音や振動に苦しみつづけてこられた方達にはくやしく、不本意な結果だったろうと思います。しかしこの十二年間の戦いは無駄だったのでしょうか。ひとりひとりが自分や家族の生活に危険が起きたとき、または起きようとしたとき、たとえ相手が大きな力を持ち、様々な困難が予想されても、それに立ち向かう努力をすることが無駄なことでしょうか。結果は十分でなく今後も沿線の方達の苦しみは続いてゆくことでしょうか。しかし東北新幹線や環境対策など国鉄に与えたインパクトは大きかったと思います。

戦後、民主主義、基本的人権の享有を認める立派な憲法や制度が出来ましたが、本当に私達は政治の主人公であり、基本的人権は守られているのでしょうか。私には〇〇主義、

〇〇理論といった難かしいことは判りませんが、民主主義、基本的人権は与えられるものではなく、ひとりひとりが身近に起きる行政への疑問や怒りを問い直し、投げかけ、自らの手で確保してゆくものではないかと思っています。

藤巻町を高速道路が貫通する計画を知ってから十年、私達はさまざまな疑問や要望を市、公社、県に投げかけてきましたが、いまだに納得のゆく解答を得られないのは残念です。しかし今日まで運動を守りつづけて来られた数多くの方達のご苦勞に対し、会の一員として心から感謝いたします。

有難うございました。

野鳥調査雑感

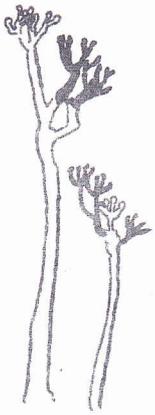
本井 恭 司

会が発足して二、三年目だったと思います。運動を進める集まりの雑談の中で、どなたの発言か思い出せませんが、季節は多分初春でしょう。「庭にウグイスが今年もやってきましたよ」とチョッピリ話題になりました。全く野鳥の類に関心のなかった私は、その話題に興味なく聞き過ぎしておりました。

翌年、この会の調査部長を引き受けるに及んで、何かユニークで、皆んなで楽しく、しかも子供達も参加できる運動はとあれこれと思いつめがらした一つが、わが町の野鳥の棲息を調査することでした。

今でこそ「バードウォッチング」なる言葉は多くの人が口に出す言葉になりましたが、当時はまだ一般的でなく、早朝、どんぐりの木の下に町内の子供達を集め、新しく買収求めた双眼鏡を胸にぶらさげて、図鑑と首っ引きで新池の回りをうろついた時は、いっばしの野鳥博士気分でした。予習のため、尾張旭市の愛知県森林公園でのバードウォッチングに参加した事もありました。名古屋市内でも八事興正寺辺りと匹敵するこの東山公園緑地地区は野鳥の棲息地であり、四季にわたってその種類の多いこともこの調査で立証済みです。

この素晴らしい環境を、いつまでもいつまでも残しておきたいと皆様とともに強く願わずにはおれません。



思い出

間瀬 正香

会の二年目から広報部に入り、鈴木さんにほとんど書いていただいて参加できた。そのころの会報は「藤巻だよりの見出しがついていた。

会報のシンボルマークの緑の小旗が作られて、母が市役所へ陳情に行く時に持って出かけたと思うが、その後、東山公園前でハガキによる一般市民へのアピールにも持参。また、各家庭の戸口にも立てたことを思い出す。

研究部の折りには、自治会長の池田氏と毎週日曜日の出前に風船揚げの気流調査をしたが、その時の経験は今後も役立ちそうだ。

山上から飛ばした風船のいくつかが低い所をフワフワと飛び、荒池付近から植田山方面へ流れて行ったものや、ある時は、ハイエースの前の道路（焼山）で百メートル程急上昇し、今度は、われわれの立っている山の上を北に向かって飛んだ。藤巻では南に流れている気流が、上空では、まったく反対の北に風が吹いているということがわかりびつくりした。

また、道路公社の気流調査で昭和五十五年七月二十七日

夜八時、豆電球をつけた七〇センチほどの赤い風船ノリフトバルーン（ビニール袋）をクレイン車の先に取付けて飛ばした時は、風速10^{m/s}。くらいあり（公社測定は4.2^{m/s}）見ているうちにまっすぐ南へ飛んでいった。

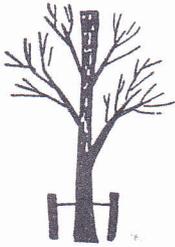
市計画局の永井氏も蚊取線香を腰にぶらさげて一晩参加されていたが、お仕事ご苦労さんと言いたかったのをおぼえている。

次の朝、八時ごろに飛ばした時は、やはり風が強く、今度は反対に南風で植物園の上を飛び、星ヶ丘方面へ行った。しかし、排ガスの拡散のようすをもっと勉強しなければと思っている。

その後は、広報部で会報の原稿の清書と配布のお手伝いしかできなかった。

十年、長いようでも、高速1号線西部、2号線南部、中部、北部と完成が早まっている。

藤巻ルートの廃止か、ルート変更に、みんなの力で持つて行きたいと思う。



〃 拝啓 名古屋テレビさま

川崎 道子

以前から貴社のグリーン、グリーン、グリーン、キャンペーンに好意を持っているものです。二月十一日放送のこちら報道部「都市高速道路を考える」を拝見しました。

私は名古屋市東部に住んでいますが、ある日突然に高速道路計画に巻き込まれました。以来約十年、土地の環境や子供達の健康を守るため、不偏不党をモットーに反高速運動に参加しています。毎年々々、県や市、計画局に請願や陳情に出かけ、この番組と同様の質問を繰り返して来ました。担当者は絶えず変わり、その返事は全く血のかよわぬいものです。その都度いわれることは「反対のあなた方より何倍も多く推進の人々の声があるのだ」ということばです。

環境を悪化させ、赤字のつけのまわって来ること必至のこの計画は、見直しの時期です。ぜひ、もっと良い時間帯に再放送して下さい。そして多くの市民、特に推進を叫ぶ人々に見てもらいたいと思います。

これは、三年前のことですが、たまたま見た番組で、意

見や感想をとということだったので、右の手紙を出しました。さっそく番組の担当者から電話が来しました。

。再放送の予定はない。

。必要ならビデオテープを作ってあげます。

。コメントを取りたい人はなかなか会ってくれず、会っ

てものらりくらりで本音は聞けなかった。

。制作者側は全く中立の立場で作った。

。反応はかなりあったが、賛成派からの方が多い。

—— 以上のようなことでした。

全員参加と協力を

相原 宗之

先般道路公社の高速道路計画見直しが出され、高速道路問題全体の転換期を迎えようとしており、この時期に私達の十年間の運動を振り返り新たな出発を皆で確認する十年誌がまとめられることに対し、運動に若干ではありますすが携わってきた者としてさらなる前進を期待し寄稿させていただきます。

事務局を担当させていただいた時期（55年～59年）は市当局公社からの大きなアブローニはなく、内部的な結束と

運動の輪の拡大に向けての蓄積を中心に、会員皆さんの協力を得ながら、市長陳情、公害現地調査、広域広報の発行など微々ながら最大限の力量発揮に勤めてきました。が、運動は遅々として進まず会員の皆さんの期待に十分応える事のできなかつた事を、この場をかりて深くお詫びする次第であります。

この運動を通じて感じたことは、運動は一握りの人がやるのではなく、皆が一致協力してこそ大きな力となるものであり、そこから相互連帯、信頼が生まれ、思いがけない力を発揮するという事で、十年間の経過が如実に物語っていると思えます。

敵しい状況にさしかかっていますが、今こそ「藤巻ルート撤回」に向け、藤巻住民が一致団結しなければならぬ時期だと思えます。この十年の運動の経過を振り返り新たな出発に向け「全員参加」のもと、この緑と静かな環境の「藤巻町」が破壊されないよう頑張っていこうではありませんか。

